



楷

No. 7 October 1988

大学の図書館の本はおもしろくない

鹿田分館長 矢部 芳郎

私には、学生時代に読んだ大学の図書館（医学）の本で面白いと思ったものの記憶はない。

大学に入って初めての講義の日のことである。先生が入って来て頭の骨の標本をテーブルの上に置くと、いきなり黒板に *Ossa cranium* と書き、続いて骨の各部を指さしながら、その名前をラテン語で書いてゆく。他の学生が一生懸命ノートをとっているの、私もあわててノートを広げて書いていたが、とてがついていけない。途中であきらめて、先生が書いてゆくのをじっと見ながら、残りの時間を過ごした。2時間の講義が終わって、最後に“こういった調子で講義を進めてゆきますから”といて先生が出て行ったとき、ほっとしたような、また、あつけにとられたような感じであった。まともにノートも取れていないし、第一何が何やらわからないので、講義後に図書館へ行って本を見ることにした。

図書館に入ってみると、金網があって、その向こうに図書が並んでいる。その中の解剖学の本を見つけて、部屋の片隅にあるボタンを押すと、奥から係の人が出て来たので、本の名前を言って貸してもらった。大きな厚い本で、しかも4冊。講義で聞いた頭蓋骨の他に人体の骨が次々と描かれており、それにすべてラテン語で名前が書いてある。説明というようなものは余りない。骨の次に筋肉、内臓、

目 次

・大学の図書館の本はおもしろくない……… 1	・利用者の声……… 8
・私の本棚から……… 3	・係の紹介 学術情報係……… 9
・昭和62年度大型コレクション……… 4	・日誌・その他……… 10
・池田家文庫シリーズ③ 池田家文庫と源氏物語……… 6	

血管，リンパ管，脳，神経，顕微鏡図。これだけ全部をこれから読んで，聞き慣れない言葉で覚えてゆくのか，とうんざりしながら本を閉じて返却した。

医学生としての生活が始まってしばらくたったある日，友人が面白い本を買ったから読まないかといっぴ一冊の本を貸してくれた。講義の後，その本を図書の片隅で読んだ。医学校を卒業したばかりの医師が，炭坑町の診療所へ赴任し，頑固だがやさしく誠実な老医師の下で代診を勤めながら，医師として成長し，結婚し，更に都会へ出て成功するが，やがて家庭を捨て，失敗する。そして，若かった日の自分のことを思い出して，新しく出発しようと亡き妻の墓をたずね，その傍らに立って，砦のように湧きたって来る雲を眺めるという物語——クローニンの『城砦』であった。図書館の人に閉館時刻が過ぎてしまっていることを告げられるまで夢中で読んでいた。

解剖学の本は，全く面白くなかったが，医師となるためにはどうしても読んで勉強しなければならぬものであり，無理して読んで勉強したおかげで，私はその後の基礎医学・臨床医学の諸科目を終え，医師国家試験にも合格し，何とか無事に医師となることが出来た。（私自身は，その後基礎医学の道を歩み，結局医師免許を使うことはなかったが。）

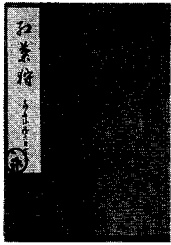
クローニンの『城砦』の方は非常に面白かった。そして，最初余り面白く感じられなかった医学の勉強をその後も続けてゆくエネルギーを私に与えてくれたし，また，私が基礎医学を志すことになったことにも，少なからぬ影響を与えてくれたと思う。

私の学生時代は，戦後の焼け跡の時代であり，本屋にある医学の教科書も少なく，たまにあっては高価で手が届かなかった。また，大学の図書館にあるものも，戦前からの古いものばかりであり，数も少なく，読みに行っても他の学生が読んでいて，読めない場合がしばしばあった。勿論，冷房はなかった。暖房といえば石炭を焚くダルマストーブが大きな部屋に1つあるだけであった。それも焚かれていないことが多かった。現在の岡山大学の図書館は，本の種類や数，またその設備においては，私の学生時代とは比較しようもない程充実し，整備されている。したがって，自分にとって読み易いと思われるものを自由に選択しながら，快適な条件下で読むことが可能である。実に良くなったものだと思う。しかし，学生にとって大学の図書館の本は面白くなったであろうか。

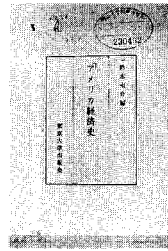
大学が専門的な知識の習得の場である限り，そこにある本は，人によって，また読み方やその指導の仕方によって差があるのは当然としても，やはり私達の時代と同じように面白くないのではなからうか。なぜなら，与えられるだけの学問のための，しかも，ものごとの基礎に関するものという大学図書館の学生用図書の本質は変わらないのだから。そして，必要最小限のものは読んで勉強しなくてはならないということも，全く昔と同じである。学生の方達には，面白くなくても読んで勉強して欲しい。無理やりにでも詰め込んで。私がよく思ったように“試験に落ちたら困る！”と，ただひたすらそう思いながらでもよい。また，大学の図書館にも，専門科目に多少とも関係したもので，学生にとって面白く読めるような本が少しくらいはあってもよいのではないかと思う。

（やべ よしろう 医学部癌源研究施設ウィルス部門 教授）

私の本棚から



『紅葉狩』
能楽・喜多流稽古用宗本
喜多流刊行会・刊



『アメリカ経済史Ⅰ・Ⅱ』
鈴木 圭介・編
東京大学出版会・刊

林間に酒を^{あたた}めて紅葉を^た焼く

私の本棚には、歯科大の学生時代、部活動の残影ともいえる、謡曲と能楽に関する何冊かの本がある。

当時、能楽堂で年1回発表会が催されたが、その技量は当然のことながら「学芸会」の域を出ず、幽玄の境にはほど遠かった。しかし、単調な学生生活に、結構アクセントを与えてくれた。その一場面を写真として教授室の壁に掲げているが、だれも気づいてくれない。

日本の伝統芸能である能は、世界で最も古い形式演劇とされるが、一般的になじみが薄い。最近、世阿弥の「風姿花伝」の解説書を読むことは少なく、もっぱらストレス解消になるのは、謡本を開く時である。私がシテ（主役のこと）を演じた1つに「紅葉狩」がある。内容は「美女（実は鬼の化身）の催す紅葉狩の宴に惑われる武将が、正気を取り戻してこれを退治する」というものであるが、その一節は次のようである。

“林間に酒を^{あたた}めて紅葉を^た焼くとかや^{*}げ
に面白や所から^{いわ}巖の上の^{こけむしろ}苔席片敷く袖も
紅葉衣の紅深き顔^かばせの 此の世の人とも思わ
れず 胸打ち騒ぐばかりなり さなきだに
人心^{ひとこころ} 乱る節は竹の葉の 露ばかりだに受
けじとは 思ひしかども^{さかすき}益に向へば変わる心か
な されば^{ほとけ}佛も^{いましめ}戒の道は様々多けれど 殊
に^{おんじゆ}飲酒を破りなば・・・”

秋になると大学祭などで飲酒の機会が多くなる。過飲による事故には、くれぐれも注意して欲しいものである。

*和漢朗詠集、白楽天の句

(永井^{ながい}教之^{のりゆき} 歯学部口腔病理学 教授)

現代アメリカをどう見るか

わが国のアメリカ研究は、ヨーロッパ研究とは異なって、敗戦後に本格的な興隆をとげた新しい研究分野である。その主たる問題関心は、わが国の民主化のあり方を念頭におきながら、アメリカにおける純粋度の高い産業資本の確立過程を探ること、政治過程に即していえば、アメリカ民主主義の形成過程を明らかにすること、に置かれていた。私が大学院で、アメリカの社会・政治理論について勉強をはじめた60年代後半は、ちょうどそうした研究の集約段階にあっていた。

1972年に刊行された本書の第1巻は、その代表的な作物である。だがこれは、当時の研究状況に制約されて、1870年代の産業資本確立期までで終わっており、現代アメリカには、まだかなりの距離を残したままであった。

それから15年余を経た今年、独占資本の確立・展開期を対象とした第2巻が、公刊された。本書が、さらにニューディール期以降をあつかう第3巻によって引き継がれるとすれば、鈴木圭介氏を中心とした通史は、わが国のアメリカ研究を代表する貴重な仕事となるはずである。

むろん「アメリカ時代の終焉」が語られる今日、われわれのアメリカ観は、従来と同じではありえない。事実本書の第2巻は、第1巻とは対照的に、執筆者間の視角のズレをあらわにしている。アメリカ像が多様になり拡散しつつある現状の、一表現であろう。われわれもまた、本書との対話を通じて、自己の現代アメリカ社会像を再検討してみなければなるまい。

(高城^{たかぎ}和義^{かずよし} 法学部政治学 教授)

「よ る こ び」

松 浦 正 義

昭和62年度図書資料（大型コレクション）として、UMI(University Microfilms International)の英文学研究論文コレクションを岡山大学中央図書館に容れていただく幸運を得た。これは1975～84の10年間に米国の各大学で受理された学位論文のうち、古期・中期英文学研究の各分野に関する論文の全てを含むものである。

この特殊コレクションを持つ国立大学は、調べた限りでは他に無く、また、これは（日本の英文学研究にとっての悲しき現状であるが）大型コレクションとして国立大学が収書した英文学界最初のものである。研究会、学会等で機会を得ては、このコレクションの導入近きことを案内してきたが、研究者諸氏の歎びと期待は予想以上のものであった。いま、全642点の論文を目の当たりにして、その麗大さに驚く。

本コレクションは、全米学位論文『古期・中期英文学研究 Pts. A & B』である。

A編は246論文、分野別にすれば、

中世文学一般	84点
英語文学一般	38点
古期英語一般	81点
ベオウルフ研究	29点
エルフリック研究	10点
キネウルフ研究	4点

B編は396論文、分野別にすれば、

中期英語一般	60点
--------	-----

ロマンス詩	87点
演劇	44点
ラングランド研究	34点
チャーサー研究：総論	66点
チャーサー研究：	
カンタベリー物語	36点
ガウァー研究	10点
マロリー研究	25点
ガウエイン研究	30点
スコットランド詩人研究	12点
宗教詩・神秘的作品研究	44点
アイルランドの作家・作	
品研究	6点
ウェールズの作家・作品	
研究	2点

である。

その大半は、出版界の経営的判断から、将来個別に出版されることのないものと思われるが、経済原理に基づく省略・変容の加えられておらぬ、これらオリジナルは、指導教授、陪席教授、研究科長、等の署名の跡も生々しく、それぞれの大学独自の審査様式の一部をうかがわせて興味深い。しかし何より、研究者自身のタイプ仕様、タイトル・行間への目配り、手書きの特殊記号からは、Ph. D. に至る若き学徒の清新な心の高ぶりが伝わってくる思いがする。平均して約250頁、長いものでは450頁を超える

ものも少なくない。

次に幾つかの大学の審査論文総数を示す。勿論、当コレクションは古期・中期英語英文学に関するもののみであるから、各大学は英文学の他の時代・ジャンルに関する Ph. D. 請求論文を多数査定していることは論を待たない。所収の論文数は、例えば、

ハーバード大学	8
イェール大学	18
コロンビア大学	17
オハイオ州立大学	8
オレゴン州立大学	4
ロード・アイランド州立大学	2


である。意外なのは、このコレクション中に、修士論文が数点含まれていることである。

言うまでもないことだが、時に玉石混淆と評される米国の Ph. D. 論文ではあるが、その10年間の集積は、特定分野に限ってみても、驚くべき迫力に満ちたものであり、その多様な細密分野への先端的努力に感動を覚える。岡山大学のみならず、全国の英語英文学研究者にとって、未永く刺激とも道しるべともなることを疑わぬ。

最後に、このコレクションの岡山への導入に当たっては、図書館長佐藤二郎教授の一方ならぬご努力のあったことと聞く、記して深く感謝申し上げます。

(まつうら まさよし 教育学部英語学教授)

HARVARD UNIVERSITY
THE GRADUATE SCHOOL OF ARTS AND SCIENCES



THESIS ACCEPTANCE CERTIFICATE
(To be placed in Original Copy)

The undersigned, appointed by the
Division
Department of Celtic Languages and Literatures
Committee

have examined a thesis entitled
Lebar Gabala: Recension I

presented by John Price Carey

candidate for the degree of Doctor of Philosophy and hereby
certify that it is worthy of acceptance.

Signature John Armstrong III
Typed name John Armstrong III

Signature John V. Kelleher
Typed name John V. Kelleher

Signature _____
Typed name _____

Date May 18, 1983

Harvard University

The dissertation of Jeanne Louise Carriere is approved,
and it is acceptable in quality for publication on microfilm.

Bengt Löfstedt
Bengt Löfstedt

Edward I. Condren
Edward I. Condren

H.A. Kelly
Henry A. Kelly, Committee Chairman

University of California, Los Angeles
1975

11

University of California, Los Angeles

▲ 指導教授等の署名



池田家文庫と源氏物語



工藤 進思郎

池田家文庫には、源氏物語の写本・版本をはじめ、中世以来の諸注釈や梗概本・評論書の類もあり、その数は30部余に達する。いま紙面の許す範囲で、主要なものを紹介してみることにしよう。

藤原定家の校訂した青表紙本系統の本文を伝える梶型本『源氏物語』54冊は、池田家へ嫁いだ奥方の持参したいわゆる嫁入本だったに違わず、各冊いずれも胡蝶装の美しい写本である。また、承応3年(1654)版の『絵入源氏物語』60冊や、寛文13年(1673)刊行の『首書源氏物語』55冊は、とりわけ珍しい本とは言えまいが、池田家文庫所蔵本は、どちらも題簽がすべて能書家の手書きになっており、これまた奥入れのために別注した特製本ではなかったかと私は考えている。ともあれ、前者は絵入本の嚆矢をなすものであり、挿画は各巻に1～9図、合わせて226図を数える。後者は、一竿斎の作った頭注つきのテキストで、物語の本文に対して注釈が別冊になっていた従来の不便を初めて解消した本として重要な意味を持つ。現在、国文学専門出版の和泉書院から複製本を刊行中であるが、その底本には、この池田家文庫本も使われている。

池田家文庫の源氏物語関係書の中で特記すべきは、土肥経平(1707～1782)の手になるもの

が少なくないという事実である。経平は23歳で備前藩の番頭となり、禄4200石を受けたが、58歳の明和元年(1764)に至って蟄居を命ぜられ、宇治郷の別業竹裡館に籠って、余生を書物の蒐集・書写と研究に捧げた。世に「土肥の千冊」と称された経平本の大部分が、この期間に成ったのは言うまでもない。経平には国史・有職・国文・郷土史などに関わる多くの著作があるが、源氏物語についても『花鳥芳躰』1冊(明和8年)を著わしており、その自筆本が池田家文庫に存する。これは源氏物語の準拠・和歌・秘事・故実などに関し、数多くの旧説を集めて分類整理したもので、他に類を見ない貴重な本となっている。

経平の書写本の中で特に注目したいのは、定家の『源氏物語奥入』1冊と、熊沢蕃山の『源氏外伝』2冊とである。『奥入』は主に引歌・出典の考証をしたもので、13世紀前半に成った。その伝本には一次本・二次本・別本の3系統があるが、経平本は別本系統に属し、巻末の識語によれば、野村尚房(1640?～1729)の書写本を転写したものという。井上通泰著『南天莊雜筆』所掲の湯浅明善書簡に、「土肥典膳殿も、尚房は吾藩之和学を開き候男は此人に候。拙者も同人の世話にて少々目をあけ候と、毎々物語に御座候」とあるのは、若き日の経平(典膳)、

『花鳥芳囀』表紙・巻頭
柏の葉の墨印は、土肥の蔵書印



を和学の世界に引き入れたのが、実にこの尚房だったことを伝えるもので、経平が本書のほかにも尚房の書写本ないし所持本を多く写しているのは、こうした縁によるのであった。

次に『源氏外伝』は、巻末に「明和七庚寅春謄写之 土経平」とある。いま世に流布している本には、『国文学注釈全書』や『蕃山全集』に収められたもののほか、異本として神山閏次編『源氏物語蕃山抄』もあるが、これらはいずれも化政期(1804~1830)の写本によっている。池田家文庫本の本文は明らかに流布本系統に属するが、書写年代が明和7年(1770)と古い上に、経平の母は蕃山の5女、載子の娘にあたるという事情を考慮に入れるならば、この経平書写本が『源氏外伝』の由緒ある1本として重要な位置を占めるものであることは自ずから明らかだろう。

さて、『源氏外伝』の著者熊沢蕃山(1619~1691)は、前後2度にわたって池田光政に仕え、知行3000石の番頭に登用されたが、明暦3年(1657)、和気郡蕃山村に隠退、まもなく京に移った。本書は延宝年間(1673~1681)の成立で、ある婦人の質疑に答えた問答体で書き起こし、桐壺から藤裏葉に至る巻々より任意に語

句・文章を引いて論評を加えている。その所説には経学的思想による付会が目立ち、物語の繊細な情趣を味わうという態度は見られない。それにしても、好色物語に託して上代の礼楽・人情を説き、修身・齐家・治国の資たらしめる点に源氏物語の本旨があるとしたのは、陽明学者たる蕃山の面目を如何なく発揮したのと言えよう。本居宣長の「ものゝあはれ」説は、このような蕃山の「儒者ごころ」に対する反論を主要な契機として成ったのであって、その点にも本書の存在意義を認めることができる。宣長が「ものゝあはれ」説を『源氏物語玉の小櫛』に収めて刊行したのは寛政11年(1799)のことであったが、当時その所説は斬新というよりむしろ異端に近い感があった。備前藩出身の幕末の国学者で、宣長に私淑していた萩原広道(はぎわらひろみち)でさえ、その著『源氏物語評釈』において「ものゝあはれ」説を退け、安藤為章(あんどうためあきら)の『紫家七論』(元禄9年)における儒学者流の諷諭説に加担しているのは、その間の事情を如実に物語るものと思う。池田家文庫に宣長の『玉の小櫛』が欠けているのは、決して偶然のことではなかったのである。

(くどう しんじろう 文学部日本古典学 教授)

I like 鹿田分館

1. 本屋と図書館、どこがちがうか

友人によれば、前者は返品おことわり、後者は返さないといわれるとのことだ。言い当てていると思ったけれど、どうも「楷」の話ネタにはし難いので、別の友人に聞くと、図書館の本は古いよ、という。確かに単行本は少し遅れているものがある。でも、雑誌類はなかなかそろっているよ、と反論したら、総論的な勉強のときは新しい総説書の方が便利だと返ってきた。それで、改めて書架を見ると、なるほど、学生のそういうニーズに対応した本が少ない気がしてきた。そこで、図書館をもっと面白くする方法を話合っているうちに次のアイデアが出てきたのである。

2. AV (オーディオ・ビデオ) の時代なのだ

本は一種の情報ファイルであるが、これからは他のメディアがとって代わるところもあろう。例えば、ビデオなら書物に載せきれない情報(動きとか、音とか)が、高密度に収録できる。医学の分野でいえば、発生の過程や心エコー法など、空間・時間の立体的な構成が必要なテーマにはかなり威力を発揮するのではないか。さらには、名講義を末長く保存したりもできるし活用法はいろいろ考えられるのである。

そうでなくとも、と別の人は言う。ビデオはもう特別な機械ではないから、誰でも使えるし図書館にAVの部屋があって、個人用のブースが5つくらいあれば素敵じゃないか・・・と。

視聴覚室の設置はなかなか有望であろう。

3. 既存の枠組を超えて

医療技術短大ができてから、一般教養書や医

療科学の本が増えて大変うれしいが、配架が今一つ系統的でないのが残念である。さらに言えば、この機会にこの分野の本がもっと充実するとよいと思っている。というのも、医療に対するニーズが拡大・多様化し、いろいろな問題を解決しなければならない状況に、図書館が柔軟に対応してほしいからである。

具体的には、従来の解剖学、生理学・・・という講座に対応した配架では収容しきれない本(栄養学、心理学、医療統計学などなど)が、「その他」に配架されているが、これを現在、看護学校・医療技術短大関係の本と統合して「医療科学」として配架し直すのである。そして、現在あまり入っていない分野(理学・作業療法、スポーツ医学、Social Working、臨床疫学、臨床工学、病院管理学、医事法制など)の本を拡充すれば、新しいチーム医療の時代に対応できると思うのだ。

これは、また雑誌にもいえることで、医療科学の分野のタイトルが増えれば、さらに良いと考える。

4. おわりに

思いつくままに、好きなことを書かせていただいたが、鹿田分館は、落ち着いた雰囲気キャンパスの中でも居心地が良く、思い入れのあまり要求水準が高くなってしまっている。

いつも大変忙しい中、笑顔を絶やさないカウンターの方々をはじめ、館員の皆様の仕事が増えてしまいそうであるが、少しでも夢が実現すれば望外の喜びである。

(医学部4年生 伊藤 武彦)

学 術 情 報 係

時々こんな電話がかかってくる。

「×××の雑誌はあるでしょうか？」

「×××の本について教えてください。」

「文献検索をしてもらえますでしょうか。」云々。

どうやら世間は、学術情報係を文献調査係と
思っているに違いない。

だが、学術+情報という名前を素直にとれば
学術関係の情報を扱っていると解釈できる。理
由の無いことではないのである。

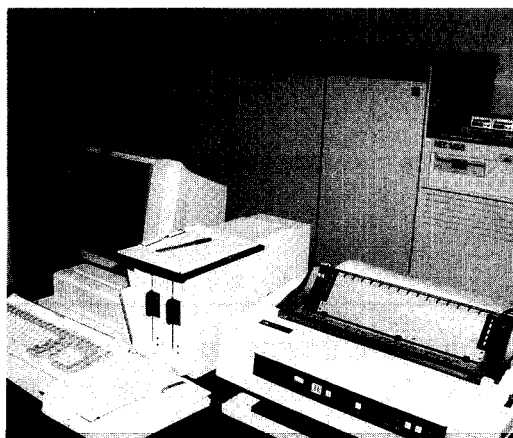
しかし、その素直さが仇になることもある。
残念ながら学術情報係では、文献調査、及び情
報検索サービスは行っていないのである。むしろ、
学術情報係の情報は、情報システムの情報
と取ったほうが分かり易い。つまり、図書館に
おいても、近年、他の分野と同様にコンピュー
ターを利用した業務処理が拡大しつつあり、学
術情報係は、そのシステムに関する係であるとい
える。

係は、図書館の3階にある。部屋の半分は電
算機室になっており、部屋中、常にモーターの
音が響いている。コンピュータというのは、随
分やわな機械なので、暑さに弱く（だから、学
術情報係の部屋はエアコンディショナーが備え
てあり、いつもひんやりしている）、埃に弱く（だ
から、清潔好きでないと住みにくい）、湿気に
弱い（だから、長く部屋にいと即身成仏して
しまうのだ?!）。わが係の業務は、コンピュー
タなしには成り立たない業務がほとんどである
のだから、多少厄介な代物であっても共存して
ゆかねばならぬのだ。それでは、係の主要な業
務を紹介してみる。

1. システムの構築に関すること

コンピュータを導入したからといって、本を
収集し閲覧に供するという仕事は、依然として
図書館業務の中心である。図書館利用の目的が
今のところ大きく変わるということはないだろ
う。（変わるとすれば、文献情報等、書籍その
ものではなくて、それに関する情報を扱うと
いった側面が、ますます拡大していけらう。）
ただ、閲覧のサービスについていえば、実物の
本を貸借するという側面に加えて、図書館の本
にアプローチする手段を提供するという側面が
あり、利用者から見た場合、アプローチの手段
がデータベースの検索に代わるというのが大き
な違いだろう。ただし、道具としての端末の不
足、遡及入力用のデータの作成などの問題点も
あるので、すぐに満足のいくシステムを作り上
げるとことは困難である。

限られた条件の中で、システムがどういうも
のであり（図書館用ソフトを利用するので）、
どう利用し、どう修正すれば、最適なシステム
となるかを考えることも係の仕事である。しか
し、これは一係で出来ることではないので全て
の係との協議によって成される。



2. データの保存・障害対策

コンピュータシステムはネットワーク化すると、データを集中し、縦横に利用することが出来るが、そのためにデータが壊れたときのリスクも大きい。普段から、データをセーブしコピーを保存する等の処置が必要になる。また、障害時には、破壊が最少限になるようにデータを復旧しなければならない。これらは、システムに本来備わっていないものであり普段は、それら进行操作することによって対処しているが、対処しきれない部分については、その場その場で方法を見つけ、手作業で行う場合もある。

3. プログラムの作成

一般用ソフトを利用する場合、業務の全体をカバーしない場合がある。業務のやり方を変更するなどの対処ができない場合には、業務と他のシステムを分析し、プログラムを作成してシ

ステム内に組込む必要が生じる。

以上が、コンピュータに関しての、主要な業務である。

4. 統計と広報

統計は、各係から提出されるデータの集計がその役割であり、集計したデータは、文部省・日本図書館協会等に提出するとともに、図書館での書籍購入の際の参考資料として利用されている。

広報は、館報や概況等の発行である。館報は年2回、概況は隔年に発行している。編集委員の召集や事務連絡、原稿の収集、配付にいたるまでの庶務を引き受けている。

以上のように、直接図書館利用者と接する仕事は何もないので、利用者には馴染みの薄い係ではあるが、より多面的で、利用者にとって便利な図書館に発展させてゆく上で、多少なりとも役に立っているかもしれない。

日 誌

63. 4. 19 第15回（昭和63年度）国立大学図書館協議会中国・四国地区協議会
(於 ホテルニューいなば)
63. 4. 20~21 第36回中国・四国地区大学図書館協議会総会（於 ホテルニューいなば）
63. 4. 28 昭和63年度（第1回）附属図書館運営委員会
63. 5. 24 昭和63年度国立大学附属図書館事務部課長会議（於 東京医科歯科大学）
63. 6. 23~24 第35回（昭和63年度）国立大学図書館協議会総会
(於 兵庫県公館・神戸市相楽園会館)
63. 7. 6 昭和63年度（第1回）池田家文庫等特殊文庫委員会

〈カット〉 農学部教授 奥 八郎

〈題字〉 名誉教授 久留島 陽三

岡山大学附属図書館報 楷 No. 7

昭和63年10月

編集・発行 岡山大学附属図書館 〒700岡山市津島中3丁目1-1 電話0862-52-1111内線286